

平成 21 年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立田鶴浜高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果・課題）と次年度の取組み（改善策等）
1 新学習指導要領の趣旨を踏まえ、意図的・計画的な学習指導に努めると同時に、高い倫理観に裏付けられる教師の資質向上を目指す。	① わかる授業・魅力ある授業への工夫改善を目指した研究授業・公開授業を実施する。	研究授業に参加した回数が A 4回以上 B 3回 C 2回 D 2回未満 である。	A 16名 (72.7%) B 3名 (13.6%) C 3名 (13.6%) D 0名 (0.0%) A+B = 86.3%	研究授業を11回実施し、A+Bが目標の70%を越すことが出来た。 実施が10～11月に集中したため、次年度は、中間評価が出来るよう早い時期に実施する。
		授業の参観回数が A 7回以上 B 5～6回 C 3～4回 D 3回未満 である。	A 7名 (31.8%) B 10名 (45.5%) C 2名 (9.1%) D 3名 (13.6%) A+B = 77.3%	A+Bが目標の70%に達することができた。 次年度は、中間評価が出来るよう早い時期から実施する。
	② 教師としての資質向上を目指した校内研修会を実施する。	研修会の内容が資質向上につながったと考える教職員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 である。	A (100%)	研修会に参加した教員全員が、内容を「理解できた」「資質向上につながった」と回答し、教員が求めている内容と実施方法であったと考える。 次年度は実施回数を増やし、一層の資質向上を図る。
学校関係者評価委員会の評価	生徒の実態に応じた授業が熱心になされているが、資質向上の判断基準としている「参加した人数」は、指標として適さないのではないかと。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	資質向上について今年度は特に生徒へのカウンセリング能力の向上を目指してきたところであるが、その判断基準や尺度については難しく、今後も改善に努めていく。			

2 一人一人の可能性を十二分に引き出す教科指導により、看護師・介護福祉士ともに国家試験合格率100%を目指す。	① 専門教科の指導の充実を図るとともに、習得度が一定レベルに到達するまで補習や個別指導を実施する。	(衛生看護科) 1回で目標達成した生徒が <高校> A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 である。	(衛生看護科) <高校> 1年生 C (76.9%) 2年生 C (70.7%) 3年生 C (78.0%)	<高校> 1年生は、再試験による修得度は一定レベルに達し、2年生は中間評価より数値が上昇、3年生も徐々に修得度は高まっているが、いずれの学年も「評点60点以上の生徒が80%以上」という目標をわずかに達成出来なかった。次年度は家庭学習の徹底と個別指導の充実を図り、全科目一定レベルの修得度達成を目指す。
		<専攻科> A 95%以上 B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満 である。	<専攻科> 1年生 D (41.2%) (1月模試) 2年生 D (65.8%) (1月模試)	<専攻科> 1, 2年生ともに「評点80点以上の生徒が90%以上」という目標を達成できなかった。目標値との差が大きく、判定基準とする模試に備えての課題の量や質、提出後の指導のあり方を見直し改善していく必要がある。特に、1年生では、得点率の低い場合の過年度データ等を活用し、国家試験に対する意識の強化を図っていく。
		(健康福祉科) <1,2年生> 定期考査の専門科目の評価が60点以上の生徒の割合が	(健康福祉科) 1年生 A (85.0%) 2年生 B (71.8%)	1年生は、放課後学習等の効果により、60点未満の生徒の数が中間評価段階での10名から6名に減少した。 次年度においても早期から個別指導を取り入れ、

		<p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 である。</p> <p><3年生> クラスの平均得点率が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 である。</p>	3年生 B (76.7%)	<p>学習習慣の確立に努める。 2年生は、30点台の生徒はいなくなったが、放課後学習が定着せず、中間評価からの大きな成果はみられなかった。次年度は個々の意識改革を図る必要がある。 3年生は、小テストによる重点項目の確認等により、12月で60.8%、1月で76.7%であった。中間評価から比べると少しずつ伸びてきている。クラス平均得点率Aが80%以上とやや高い設定となっているが、国家試験全員合格という観点から次年度もこの設定で行いたい。</p>
--	--	--	---------------	--

学校関係者評価委員会の評価	衛生看護科の習得度の評価結果が低いことが気がりである。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	昨年度もこの時期は同様な結果であり、国家試験直前でようやく目標レベルに到達し、両科ともに国家試験全員合格を達成することができた。次年度は高校段階でのレベルアップに取り組む。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果・課題)と次年度の取組み(改善策等)
3 地域の医療・福祉機関を支える看護師・介護福祉士の役割の大きさを啓発に努め、本校志願者の増加を図る。	① 学校説明会及び地区説明会、「看護・福祉への道」説明会等の啓発活動を強化する。	説明会等への参加人数が、 A + 10% B + 5% C 5%～0% D - 0%以下 である。	A (+ 72.0%) H20年度・・・132人 H21年度・・・227人	経済情勢の悪化や就職難などによる看護・福祉への関心の高まりに加えて、中学校への働きかけやケーブルテレビ、ポスターによる早期の広報活動が参加者増に繋がったと考えられる。 次年度も地域の広報を一層活用するなど、更なる広報活動の充実に努める。
	② 中学校の文化祭や地域での健康チェックを実施する。	本校に対する理解が深まったという人数が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 である。	B (80.3%) アンケート合計716人中 大変深まった375人 概ね深まった200人	アンケートの5つの選択肢の内、肯定とも否定とも取れる「普通」の数値が15%であった。 次年度は選択肢を「普通」以外の4項目にするとともに、引き続き健康チェックを通じた本校への理解活動を実施する。
	③ 小・中学校への福祉の出前授業や本校での交流学习を実施する。	小・中学校の出前授業や交流学习の実施回数が A 30回以上 B 20回以上 C 15回以上 D 15回未満 である。	A (34回) 小学校 19回 中学校 15回	前年度に比べて中学校での実施回数が増え、全体で30回を越えた。福祉理解についてもアンケート結果から全体の99.2%の児童・生徒が福祉について理解できたと答えており、取組の成果がみられる。 次年度も出前授業を継続し、小・中学生に福祉に対する理解を深める機会とする。

学校関係者評価委員会の評価	準備等も大変であるが大変良い取組であり、キャリア教育にも役立っている。今後も継続して実施して欲しい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	次年度も同様の目標が求められているため、取組を継続する。

4 部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、看護や福祉の道を進む生徒にふさわしい体力向上に取り組む。	① 部活動を活性化させるため、活動日数の増加を図る。	年間活動日数（12月まで）の平均が 運動部 文化部 A 150日以上 60日以上 B 135日以上 50日以上 C 120日以上 35日以上 D 120日未満 35日未満 である。	運動部 A (185日) 文化部 A (60日)	前年度に比べて運動部は大幅に増加したが、文化部はかろうじてAを達成したに過ぎない。今後も活動日数調査を継続するとともに、生徒の要望に添った新たな文化部の創設など、部活動の一層の活性化に取り組む。
	② 体育の授業に持続的運動を継続的に実施するとともに、合同部活動を推進する。	体力テストの「持久走」の記録が向上した生徒が A 10%以上 B 5%以上 C 5%未満～0% D 減少した 1,2年生の A 80%以上 B 70%以上 C 50%以上 D 50%未満 が合同部活動に参加した。	A (47.5%) 1年生 (59.5%) 2年生 (41.9%) 3年生 (34.5%) A (86.6%) 1年生 (93.8%) 2年生 (79.3%)	5月と11月の測定記録を比較した結果、各学年とも目標を達成した。しかし、学年が上がるほど記録が向上した生徒の割合は少ない。3年生への持久力維持・向上の取組みが課題である。 次年度も体育の授業に持続的運動を継続実施するとともに、外部講師を活用するなどして一層の体力向上を図る。
学校関係者評価委員会の評価	新たな文化部（軽音楽部）の創設は中学校からの継続を考えると評価できる。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	軽音楽は社会にでても役立つ。可能な限り支援していく。新たな部の創設が生徒の意欲を高め、他の部活動の一層の活性化に繋げていきたい。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果・課題）と次年度の取組み（改善策等）
5 わかる授業・魅力ある授業の展開に努めると同時に、現場実習を通して、思考力・知識の活用力・コミュニケーション能力を育成する。	① 病院実習における技術体験を増やすことにより、指導者や患者とのコミュニケーションの機会を増やす。	看護技術水準（実習を通して体験すべき技術）の8割以上を達成した人数が、クラスの A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 である。	D (40%)	8割の体験項目を達成できた生徒が40%に止まったのは、各病棟ごとに酸素吸入法や経管栄養法（流動食の注入）など体験すべき項目が、今年度実習対象患者の疾病の状況から、一病棟あたり予定した10項目を下回ったことにもよる。しかし、実習病院の協力で平均8.5項目は確保されており、生徒の積極的な病棟指導者（看護師）や患者への働きかけを指導できなかったことによると考えなければならない。自ら食欲に看護技術の体験数を増やしていく積極的な姿勢を生徒に植え付け、困難を打開できるコミュニケーション能力を高めるため、2・3年生時での実習発表会を通して、実習への理解を深めていく。
	② 施設実習において実習指導者と連携を図り、生徒が利用者と	実習評価のコミュニケーション能力に関する評価が、「3以上」の生徒の割合が、	A (88.9%)	4段階中「3未満」の生徒が1年生で6名、3年生で2名いたが、全体では目標を達成した。 次年度は、1年生の実習事前学習にコミュニケ

	関わりをもつ機会を増やす。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	である。	ーションに関する具体的模擬体験を取り入れるなどして、全員が3以上の評価を得られるよう取り組む。
学校関係者評価委員会の評価	コミュニケーションについては、看護学生にとっては厳しい基準であり、辛い評価結果である。レベルの高いものに挑戦することは良いことであるが、難易度も考慮すべきである。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	判断基準を決める際に、もう少し現状把握に努めるべきであった。次年度はコミュニケーション能力については、生徒の自己評価を実施するなど、判断基準を改善する。			

6 看護や福祉の道を目指す生徒として、自らを律し、進んで社会的な生活規範を守り、生命を尊重し、他を思いやる豊かな人間性の涵養に努める。	① 携帯電話利用に潜む危険性の周知とフィルタリングの徹底を通して、ネット上のいじめの防止等を図る。	書き込みをした生徒の人数が A 50%以下 B 60%以下 C 70%以下 D 70%以上	である。	C (69.8%)	昨年(80%)より改善は見られたものの、12月のアンケート結果によると、書き込みをした生徒は、1年生79人中60人(76%)、2年生76人中55人(72.4%)、3年生70人中42人(60%)など、高い水準で推移している。予想以上に安易に個人情報や自分の思いを披瀝する傾向があり、安易な書き込みに伴う危険性や問題性について、具体的事例を通して、生徒のみならず保護者にも十分に周知し理解してもらう必要がある。
	② 状況に応じた行動や自らを律する行動がとれるよう、実習前に、事前指導週間を設け、指導を強化する。	実習指導者の評価において「よく出来た」と評価された生徒が A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	である。	(衛生看護科) 〈高校〉 3年生 A(100%) 2年生 A(100%) 〈専攻科〉 1年生 A(100%) 2年生 A(99.3%) (健康福祉科) B(90.4%)	(衛生看護科) 〈高校〉2年連続A評価が続いている。病院における行動はよく出来ていると評価できる。しかし、日頃の言葉遣い・挨拶の習慣が実習場面に出ることから日常的な評価に重点を置く必要がある。 〈専攻科〉 事前指導によって生徒の戸惑いが減り、実習態度は良かった。コミュニケーションに消極的な生徒が一部いるが、日頃から体験を積ませるなど、実習生らしく生き生きと臨床実習ができるようきめ細かい指導を継続する。 (健康福祉科) 実習評価項目の判断力・礼儀の評価が90.4%であった。徹底した礼儀指導により礼儀項目は、100%を達成できると思われるため、日頃からの継続した指導を行っていく。
学校関係者評価委員会の評価	携帯電話のフィルタリングについては保護者との協力の下、進めて欲しい。挨拶については指導の成果が見られる。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	学校だけでは子どもたちを育てることには限界が有り、実習やボランティア活動を通して、施設の方や地域の人々からの声かけが生徒の人間性の確立に役立っている。次年度も保護者をはじめ、地域と連携しながら生徒の基本的な生活行動の改善に取り組む。				